

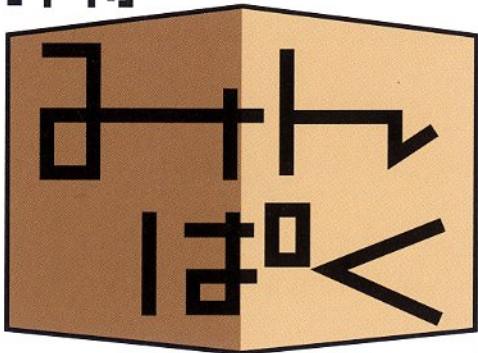
月刊

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283
平成21年1月1日発行 第33巻第1号通巻第376号

国立民族学博物館

2009

1



特集

ウツシ



公共文化施設の役割

田村 孝子

たむら たかこ／東京都出身。1965年慶應義塾大学文学部卒業。同年NHK入局。副会長秘書を経て、1968年から音楽番組ディレクターとして「あなたのメロディー」「N響アワー」「ときめき夢サウンド」「ジュリー・アンドリュース&アンドレ・プレヴィン指揮NHK交響楽団コンサート」などの人気音楽番組を手掛ける。1997年から芸術・文化担当の解説委員として文化行政への提言や情報発信に努める。2007年より静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ館長。

静岡県は県立劇場に専属の劇団《SPAC》をもつという、日本では先進的な文化政策をとっている県です。ですから演劇については東京でも経験できないような世界の最先端の作品に触れられるばかりでなく、静岡の舞台作品は世界で上演されています。でも、その意義・価値を理解している方は残念ながらほんの一部なのです。そのうえ、美術館はありますが、博物館はなく、音楽・ダンスなど他の上質な芸術に触れるチャンスがほとんどないのも現実です。簡単に東京や名古屋にアクセスできる静岡では、その必要性を感じていない方が多いのかもしれない。子どもたちや年配層、障がい者は何の経験もできない事に気づいてほしい！地域で豊かに暮らすためには、さまざまな上質な文化が身近に存在する事が大切ではないでしょうか。

そうにお礼を言う子どもたち、それに答える演奏家たちのやさしい眼差し……。これが本当の音楽だと思つた。一生に一度の経験だと思つた。子どもたちの感想に、大人の責任を痛感しました。

二〇〇八年七月、オランダのロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団のブラスクインテットを招聘したおりに、市内の視覚特別支援学校での出前コンサートをお願しました。セミの声が聞こえ、開け放たれた窓から風が……。でも体育館は飛びきりのコンサートホールでした。赤いバラ一輪ずつを手渡し、オランダ語、日本語、英語で「ありがとう」とうれし

二〇〇八年秋、東京と新潟の小学校で二ユーヨーク・フィルのティーチング・アーティストによる出前コンサートがありました。先ず音楽で子どもたちを引きつけ、六人全員が語りかけながらすめられました。さまざまな国の音楽を取り上げることにより、多様な文化に自然に触れさせるものでしたが、アーティストたちの変わらぬ笑顔が何よりのメッセージ、まさに音楽を通じての心の交流と実感しました。NYで公教育から芸術がなくなつた一九七五年から、危機感をもつて始められたこの様な取り組みは、今欧州でも盛んに実践されています。さまざまな分野の芸術団体に限らず、劇場や美術館、図書館などに専門家がいます。《芸術文化が社会に果たす役割》。その力を信じて弛まぬ努力が続けられています。

日本でも、行政、地域住民、芸術家等関係者それぞれが連携を図り公共文化施設が地域の豊かさを育む人びとの集う場になればと心から願つております。

日本でも、行政、地域住民、芸術家等関係者それぞれが連携を図り公共文化施設が地域の豊かさを育む人びとの集う場になればと心から願つております。



目次

JANUARY 2009
月刊みんぱく

1

01 エッセイ 世界へ世界から
公共文化施設の役割
田村 孝子

02 特集 ウシ

古代インドのウシの儀礼
永ノ尾 信悟
ウシと乳がもたらす富
平田 鷹弘
水牛を観る目
高井 康弘

ウシの目覚ましはツツツツツツ

編田 浩志
横綱牛は一族のほまれ

野村 雅一

08 モノ・グラフ
博物館のモノを透かして見ると
坂本 勇

10 地球ミュージアム紀行
曲面が描く、居心地のよい博物館
小林 繁樹

11 表紙モノ語り
牛鬼
笹原 亮二

12 みんなくインフォメーション

14 万国津々浦々
子連れフィールド・ワーカー奮闘記 アメリカ篇
すべての子どもたちの健康を祈って
玉山 ともよ

15 人生は決まり文句で
的に命中！ポーク！
小野田 俊蔵

16 外国人として生きる
在日南米人のドラマを載せて
古屋 哲

18 歳時世相篇
⑩阪神淡路大震災
冬の灯り、震災の記憶
林 勲男

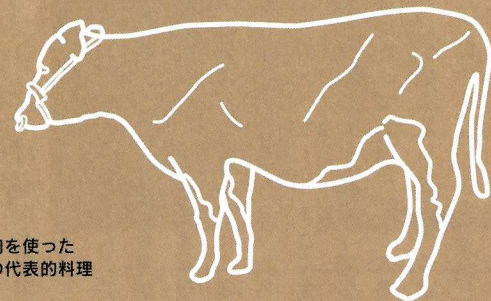
20 生きもの博物誌
「水ゴキブリ」を食べてみるかい？
川口 幸大

22 フィールドで考える
3つの時代の学校経験
金子 正徳

24 みんなく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記



草原に佇むアジア水牛(ラオス)



水牛の肉を使ったラオスの代表的料理ラーブ



牧畜民の食を支える乳製品



人間とウシとのかかわりは古い。旧石器時代末期に描かれたとされるスペイン北部のアルタミラ洞窟の壁画のなかに野牛が多く見られ、地中海一帯には、ギリシア神話のミノタウロスにも見られるように、牡牛を豊穣と精力、凶暴な力の象徴とする「牡牛信仰」があり、現在のスペイン闘牛の精神に引き継がれている。牝牛も豊穣と恵みのシンボルであり、ヒンドゥー神話の「乳海攪拌」の場面も牛乳の恵みをあらわすものだろう。聖牛スラビも重要な役割を果たしている、これは菅原道真につきものであるウシにも関係する。また、古代バビロニアを発祥とする黄道十二星座には牡牛が登場し、中国の十二支にも影響を与えたといわれる。

今年の干支はウシである。乳も含めた食料源や役牛として人とかかわりの深いウシを、さまざまな角度から考えてみたい。

古代インドのウシの儀礼

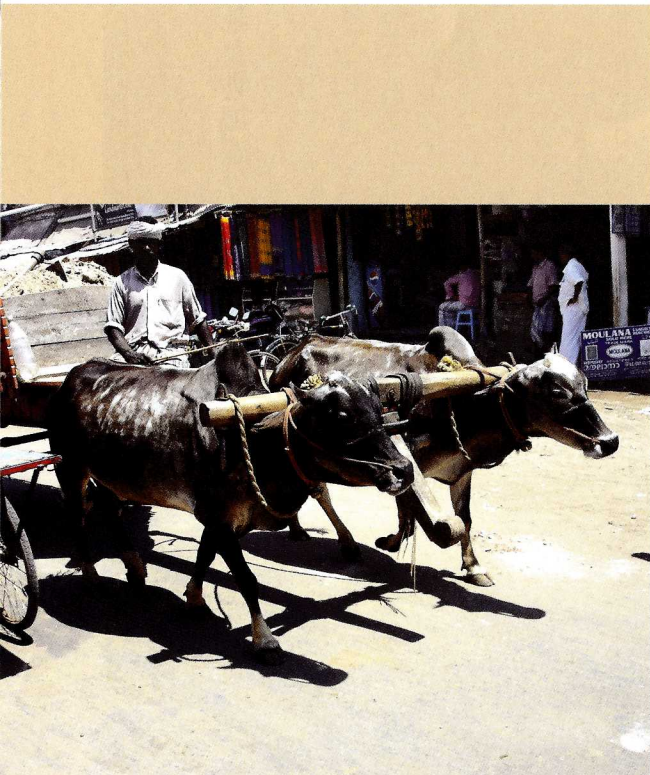
永ノ尾 信悟
(えいのおしんご)

東京大学東洋文化研究所教授

増殖を願う祭式

今から三〇〇〇年ほど前のインドでは人びとの生活は牧畜を中心に営まれていた。ウシやヤギがかわれていた。この時代のインドでは人びとはさまざまな願いの実現をめざしているいるな神まつりや儀礼をおこなっていたが、それらのなかで、ウシやヤギなどの家畜が犠牲獣として捧げられたり、ヨーグルトやバターなどの乳製品も供物として用いられていた。

ミルクを供給してくれる動物として牝牛は大切にされていた。牡のウシは多くは去勢されて荷車を引くために、また、耕作のために使用されていた。そのように大切な家畜であったために、今から二五〇〇年以上前の、インドでもっとも古いヴェーダ文献ではさまざま



インドの在来種であるゼブウシは、背中にコブがあるのが特徴(提供:杉本良男)

まな神まつりが記述されていて、家畜を望むためにおこなわれるものも多くあった。一般的に家畜という語が用いられるが、多くの場合ウシを願っていたと考えられる。

サーラスヴァタ・サットラという祭式があった。現在、インドとパキスタンの国境のあたりを流れるサーラスヴァタイー川が砂漠に消えてしまうところから出発して、その川の源流をめざして、毎日杭を投げた距離だけ進みながらおこなわれる。ウシを一〇頭か一〇〇頭連れて出発し、そのウシの数が一〇倍になつたら終了するというものである。毎年二倍になると単純に計算しても、四年はかかるほど、長いあいだにわた

っておこなわれる祭式である。一〇倍にするということからウシの略奪行と考える研究者もいるが、わたしは多分、遊牧の生活そのものを儀礼化した、ウシの増殖を願う祭式であったのではないかと考える。

ウシの群れは基本的に乳を供給する牝のウシからなっていて、去勢されていない牡のウシはわずかしいなかったと思われる。その種牛が年をとってしまつと、新しい若い牡のウシを群れに放つ儀礼がおこなわれていた。家庭でおこなわれる儀礼を記述する文献に主として記述されていて、秋におこなわれた。家畜たちの安全を守ってくれるプーシャンという神に溶けたバターを捧げ、家畜

の主とされるルドラという神に賛歌を捧げるなどしておこなわれた。この文献群より古い時代の記述では、老いた種牛はインドラとよばれる神などに犠牲獣としてささげられていた。

祖先崇拜の儀礼へ

時代が下がり、ヒンドゥー教の時代になると、この種牛放ちの儀礼はもちろんだ独立した儀礼としてもおこなわれていたであろうが、葬送儀礼や祖先崇拜の一環としてもおこなわれるようになっていく。祖先の霊は生きている人間が与える水や食べ物によりあの世で生活するという考えがあった。ある人が放つた種牛が飲んだ水、食べたものが、その人の祖先の霊の水や食べ物になると説明された。種牛放ちの儀礼をおこなった者は、過去一〇代、未来一〇代の親族を救うことになるなどと説明されていた。

ため池の完成を祝する儀礼で、そのため池を寄進した人は、ウシの尻尾をつかんでため池を渡るとされる。そのご利益は、そうすることで、死後この世とあの世のあいだの川を無事に渡ることができるとされている。

新年号に死にまつわる話を書いてしまつて縁起でもないといわれるかもしれないが、「門松や冥土の旅の一里塚と」か、お許しを願いたい。

ウシと乳がもたらす富

平田 昌弘
(ひらた まさひろ)

帯広畜産大学准教授

利用し尽くされる家畜

ウシこそ人類の富の源泉である。ウシは、食肉や乳・乳製品を供給するだけでなく、役畜としての動力源、皮革などの衣類、肥料や燃料となる糞をも人類に提供してくれる。かつてエジプトやメソポタミアでは、ウシに牽かせた犁農耕を利用するようになったことで、作業効率が向上し、糞尿が耕作地に還元するなど、ムギなどの生産性が飛躍的に向上し、これによって交易をもたらず余剰生産物を蓄積させ、労働の分業化や支配層の階級化を進展させていった。これらの力の源泉にウシの存在があつたのである。肉・乳・使役の目的で飼養されている家畜にはスィグユウ、ウマ、ロバ、トナカイ、ラクダがいるが、農耕と密接に連動し、これほ

どまでに利用し尽くされる家畜はウシより他にない。

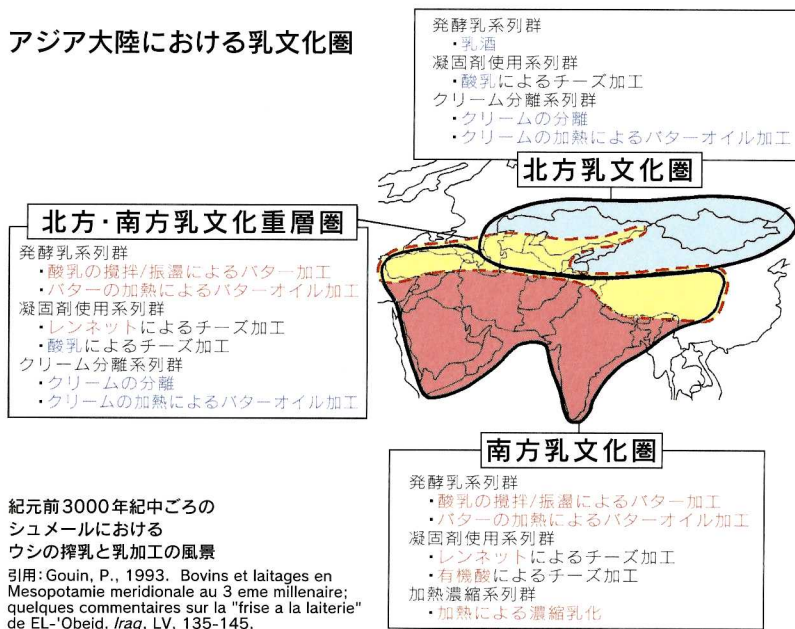
乳と乳加工

ヒツジ・ヤギの家畜化は西アジアの山麓でBC七〇〇〇年ごろに起こり、ウシはそれよりも一〇〇〇年ほど遅い。当初、ヒツジ・ヤギそしてウシは肉をえるために飼養されていたが、やがて家畜から乳が搾られ始める。ほぼ完全栄養食である乳を、我々の祖先は見逃すはずがなかった。搾乳は、遺跡出土の土器分析により遅くともBC六〇〇〇年代後半には開始されていたと推定されている。搾乳は先ずヒツジ・ヤギから始まり、ウシの搾乳はヒツジ・ヤギからの技術伝播により開始されたと考えられている。搾乳を始めたことにより、家畜を殺して肉を食さなくとも、家畜を生きたまま留め、その副産物の乳を利用して生活できるようになった。乳を利用することで、家畜に生活の多くを依存できるようになり、生業の一形態としての牧畜が成熟していったのである。まさに、搾乳という技術の発見は人類史における一大発明であつたといえよう。

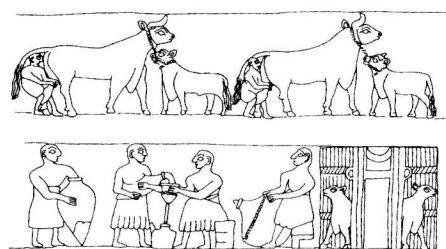
乳に一年を通して依存するならば、乳が不足しがちとなる冬をのりきらなければならぬ。だからこそ、乳が豊富にとれる夏に乳を加工するのである。乳加工

の本質は保存にある。生乳を乳酸発酵させ、脱水し、天日に曝すだけで、数年も保存可能なチーズへと変貌する。搾乳の発明以後、約八〇〇〇年のときをかけ、人類は乳加工技術と乳製品とをさまざまに蓄積してきた。現在では、地域に適應した乳加工技術と乳製品がそれぞれに発達し、極めて多様な様態を呈している。乳加工技術を大観すれば、アジア大陸では北方域と南方域とはそれぞれ特徴を

アジア大陸における乳文化圏



異にしている。北方乳文化圏では、乳からクリームを積極的に分離し、酒をも作り出している。南方文化圏では、酸乳を攪拌/振盪することによりバターを加し、ウシの胃で生成される凝乳酵素(レンネット)を利用してチーズを加工している。乳加工・利用におけるウシの貢献は、より小頭数の家畜で、より多くの乳がえられ、多量の乳製品の製造を可能にした点にある。定住しながら家畜に依存した生活、多様な乳製品を産み出し、人類の生活を豊かにしてくれた存在それがウシなのである。このように、ウシ、そして乳にまつわる一連の文化事項は、人類の文化遺産といっても過言ではない。



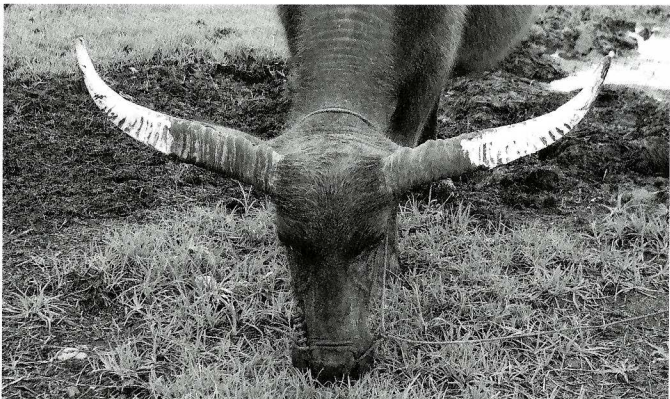
水牛を観る目

高井 康弘
(たかい やすひろ)

大谷大学教授

角のかたちと性格

ラオスの首都ヴィエンチャン郊外の屠場に行ったことがある。しかし、書類が不備で場内に入れてもらえなかった。せっかくなので、思いながら、仕方なくあたりを眺めていると、屠場前の草原のあちこちに水牛(アジアスイギュウ)が佇んでいる。各地から大型トラックで連れてこられた水牛である。角には所有者を示す白ペンキが塗られている。最初は気づかなかつたが、角のかたちには個性がある。上方に立った角や水平に開いた角や下方に垂れた角。長い角や短い角。さまざまである。同じく所在なげにしていたトラック運転手と話しているうちに、角のかたちをあらわすことはいくつかわることができた。

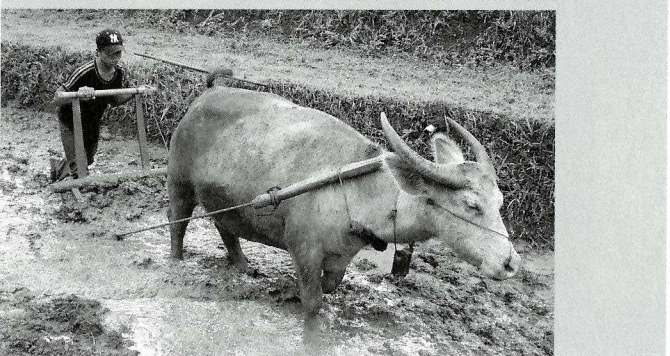


水平気味に開いた角(先はやや上向き)

以来、農村で調査する際、角のことを訊くようにしてきたが、角のかたちと性格や能力を結びつけた説明にしばしば出合った。いわく、たとえば、丸くカーブした角の水牛はおとなしい。逆に、両角が水平気味に開き、角先が上向いた水牛は気が荒い。ラオスでは耕起の際、水牛に犁や耙を装着し、背後から人が鼻紐をもつて方向を指示し曳かせるので、水牛と人はともに水田に入り間近で協働することになる。気の荒い水牛は人を傷つけかねないので、開いた角の水牛は敬遠される。そんな水牛は(御者と水牛のあいだ

に距離がある)荷車用だったと言ふ。放し飼いの水牛の場合、牡同士はしばしば争うが、人びとはその様子も見ている。いわく、開いた角の水牛は、その角で相手の脚を折る戦法をとる。角のほか、尻尾も目の付けどころである。尻尾が長い牝は仔の世話をよくするとされる。ただし、前述のような形状と性格や能力との相関が、本当にどの程度あるのかについては不明である。また、人が品種改良を意図して、特定のかたちの個体同士の交配を試みるような事例にも出会っていない。

丸くカーブした角のアルビノ(白化個体)水牛を使役して耙を曳く



役畜から食材へ

そうこうするうちに、一九九〇年代以降、ラオスでは水牛肉の流通が活発化し、また農業の機械化が進んだ。人びとが水牛を観る目は変わりつつある。そこでは当然ながら、水牛の役畜としての性格や能力はもはや評価のポイントではない。業者はどれほど肉が採れるかの一点で水牛を品定めする。その際、角のかたちなどは判断材料にならないようである。

肉の味はどうだろうか。水牛の場合、本来の黒い肌には黒色の体毛の個体は薄ピンクの肌には白毛のアルビノ(白化個体)をかなりの頻度で見かける。黒色水牛における味の偏差の話は聞いたことがないが、アルビノは肉の色が薄く、味も旨くないという。人びとは市場に並ぶ水牛肉を見て、色の薄いアルビノの肉を、業者が赤く染めて黒色水牛の肉に擬して売っているのではと疑い、もはやどんな水牛の肉か弁別不可能になった状況を嘆く。ともあれ、彼らは買った水牛の生肉を細かく刻み、香草などと和えて、ラオスの代表的料理ラップに仕上げ、蒸したモチゴメとともにほおぶるのである。

特集 ウシ

ウシの目覚ましは ツツツツツツ

縄田 浩志
(なわた ひろし)

総合地球環境学研究所准教授

音響分析を施した結果、わかつてきたことである。

ウシ管理に用いられる 音声の音響分析

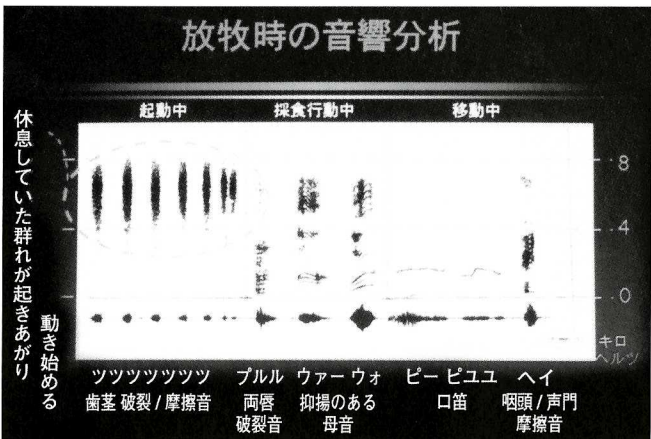
スーダン東部紅海沿岸の沙漠に暮らすベジャ族の村で、牧夫にデジタル録音が可能なミニ・ディスクをとりつけてもらい、音声を録音した。そして、サウンドスペクトログラフを用いて音響学的な記述を試みた。

すると、ウシの群れを起こしてこれから放牧に向かうというときに発せられる音声「ツツツツツツ」は、四〜八キロヘルツ



ウシを放牧するベジャ族の牧夫にミニ・ディスクをとりつけてもらって音声を録音した

ウシ管理に用いられる音声のサウンドスペクトログラフを用いた音響分析



ルツの高い音域の音声であることがわかった。じつはウシとヒトの可聴域は異なっている。もつとも弱い音でも聴きとれる最適の周波数は、ヒトでは一〜四キロヘルツに対して、ウシは八キロヘルツであるといわれる。したがって、四〜八キロヘルツの歯茎破裂/摩擦音は、ウシにとつてもつとも弱い音でも聴きとり可能な周波数であり、寝ているウシに放牧へ向かうことを告げ、群れの移動を促すために非常に適した音だったのである。牧夫がウシに発する音声「目覚まし」を音響的な側面から切り取ってみると、ある種の機能性の存在が浮かび上がった。

ヒトとウシの相互関係を かたちづくる「家畜語」

ほかにも、ウシが草を食んでいるあいだ(採食行動中)に発せられる音声として、「ブルル」「ワー」「ウォ」などがある。「ブルル」は両唇破裂音であり、「ワー」「ウォ」は抑揚のある母音である。群れの起動に用いられる音声「ツツツツツツ」と比べた場合、これらの音声はヒトにとつては声帯を使ってより大きく発声できるため、遠くにまで届く。また抑揚があることが特徴的である。これらの音声はウシたちが安心して草を食めるように発声していると牧夫はいう。抑揚をつけた音声を連続して発声することにより、ある程度離れていても牧夫がどこにいるのかウシにとつて定位しやすくなっていると推察される。

これらの音声は、ヒト同士のコミュニケーションに用いられる言語体系とは明らかに異なっており、ヒトと家畜のコミュニケーションやインターラクシオンに用いられる「家畜語」とでもよべることばである。人びとが世界各地で長い年月をかけて培ってきた伝統的知識の叡智は奥深い。まだまだわかっていないことも多い。その片鱗に少しは近づけたであろうか。

横綱牛は 一族のほまれ

野村 雅一
(のむら まさいち)

総合研究大学院大学理事・副学長
本館名誉教授

闘牛を映像に残す

ウシとウシをたたかわせる日本の闘牛は、黒潮の流れに沿うように、今日、石垣島から沖縄本島、四国の宇和島や隠岐諸島、八丈島、新潟県の上越部などの各地でおこなわれている。なかでももつともさかんなのが奄美の徳之島である。

じつは、わたしはその徳之島の闘牛の映像記録をとるために、一九九〇年秋、民博の映像音響の専門家、田上仁志氏ら撮影スタッフとともに徳之島へ出かけ約二週間かけてほぼ全島を撮影してまわった。そのときは、本誌一九九一年七月号「えすのぐらふ」に「闘牛の島」というタイトルでかなり詳しく書いている。撮影隊一同、夢中になってとつたその記録は民博ビデオテープでも見る

ことができる(番組名「徳之島の闘牛」)。

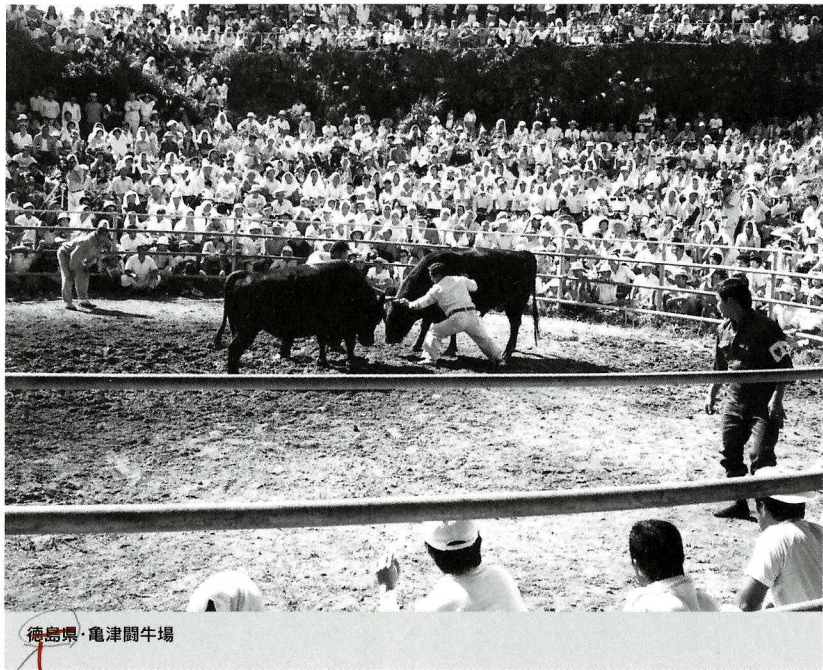
闘牛のむつかしさ

ところで、ウシとウシをたたかわせるといったが、ウシは元来がおとなしい動物で、放つておけば静かに草を食むだけで、「けんか」などめつたにしない。しかし、なかには闘争心をもつて角と角と突きあわせようとするウシがいる。「闘牛」でむつかしいのは、まずそんなウシを見つけたことだ。数十年も闘牛を飼ってきた牛主たちも、「口をそろえて「ウシのことはわからない」という。競走馬とはまったくちがって、闘牛の血統というものはないのだ。

闘牛は去勢されていない牡牛だが、生後三カ月くらいから売買され、五、六歳まで成長していく。闘牛としては一般に七、八歳から一〇歳までが最盛期といわれる。日本の闘牛は大相撲になぞらえられるが、闘牛大会での初土俵は四歳が目安とされる。

しかし、闘牛になると思つて大事に育てたウシのほとんどは「けんか」などやりたがらない。そんなウシは結局、肉牛として売り払われる(硬い筋肉ばかりなので関西方面で「コンビーフ」などにされると聞いた)。

相手に背を向けると負けになるのだが、大会で勝利を重ねて、島の闘牛番付



徳島県・亀津闘牛場

で、関脇・大関とのほりつめるウシは何千頭に一頭という確率だ。闘牛を飼うのにはもちろん金もかかる。大関、横綱クラスになると、売値は当時で一〇〇万円以上といわれていた。それでもそんなウシを手放す人はめつたにいない。そのクラスのウシは大会にでる出場料(フアイト・マネー)も一五〇万円くらいが相場だそうだ。

もつともそのようなウシの値も、いったん負けると(負け方にもよるが)、一挙に数分の一以下に暴落する。恐怖感を知つたウシをなだめ、はげまして再起させるのはきわめてむつかしいからだ。「そこはウシ。ことばは通じませんが、からね」と島の人は言う。あわれ、名牛も売り払われ、食用に処分される。徳之島では横綱牛をもつのは一族、

一村のほまれといわれるのだが、寿命をまっとうしたウシはいない。しかし、その晴れの姿の写真は牛主の家の長押しに、ご先祖の遺影と並べて祀るよう飾られている。

ウシ

特集

横綱牛は 一族のほまれ

野村 雅一

(のむら まさいち)

総合研究大学院大学理事・副学長
本館名誉教授

闘牛を映像に残す

ウシとウシをたたかわせる日本の闘牛は、黒潮の流れに沿うように、今日、石垣島から沖縄本島、四国の宇和島や隠岐諸島、八丈島、新潟県の山間部などの各地でおこなわれている。なかでももつともさかなのが奄美の徳之島である。

じつは、わたしはその徳之島の闘牛の映像記録をとるために、一九九〇年秋、民博の映像音響の専門家、田上仁志氏ら撮影スタッフとともに徳之島へ出かけ約二週間かけてほぼ全島を撮影してまわった。そのときのことは、本誌一九九一年七月号「えすのぐらふいてい」に「闘牛の島」というタイトルでかなり詳しく書いている。撮影隊一同、夢中になってとつたその記録は民博ビデオテークでも見る

ことができる(番組名「徳之島の闘牛」)。
闘牛のむつかしさ

ところで、ウシとウシをたたかわせるといったが、ウシは元来がおとなしい動物で、放っておけば静かに草を食むだけで、「けんか」などめつたにしない。しかし、なかには闘争心をもつて角と角と突きあわせようとするウシがいる。「闘牛」でむつかしいのは、まずそんなウシを見つけたすことだ。数十年も闘牛を飼ってきた牛主たちも、口をそろえて「ウシのことはわからない」という。競走馬とはまったくちがって、闘牛の血統というものはないのだ。

闘牛は去勢されていない牡牛だが、生後三カ月くらいから売買され、五、六歳まで成長していく。闘牛としては一般に七、八歳から一〇歳までが最盛期といわれる。日本の闘牛は大相撲になぞらえられるが、闘牛大会での初土俵は四歳が目安とされる。

しかし、闘牛になると思つて大事に育てたウシのほとんどは「けんか」などやりたがらない。そんなウシは結局、肉牛として売り払われる(硬い筋肉ばかりなので関西方面でコンビーフなどにされると聞いた)。

相手に背を向けると負けになるのだが、大会で勝利を重ねて、島の闘牛番付

で、関脇、大関とのほりつめるウシは何千頭に一頭という確率だ。

闘牛を飼うのにはもちろん金もかかる。大関、横綱クラスになると、売値は当時で一〇〇万円以上といわれている。それでもそんなウシを手放す人はめつたにいない。そのクラスのウシは大会にでる出場料(フアイト・マネー)も一五〇万円くらいが相場だそうだ。

もつともそのようなウシの値も、いったん負けると(負け方にもよるが)、一挙に数分の一以下に暴落する。恐怖感を知つたウシをなだめ、はげまして再起させるのはきわめてむつかしいからだ。「そこはウシ。ことばは通じませんからね」と島の人は言う。あわれ、名牛も売り払われ、食用に処分される。

徳之島では横綱牛をもつのは一族、一村のほまれといわれるのだが、寿命をまつとうしたウシはいない。しかし、その晴れの姿の写真は牛主の家の長押ながしに、ご先祖の遺影と並べて祀るよう飾られている。



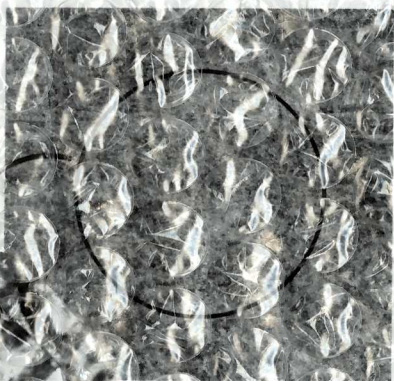
鹿児島県・亀津闘牛場

特集

ウシ



(写真1 A) 自然光で見た無地で地味なハワイの樹皮布



(写真1 B) 右上の樹皮布を光にかざしてみると美しい「透かし模様」が浮かび上がってきた

モノグラフ

博物館のモノを透かして見ると

坂本勇(さかもといさむ)

駿河台大学非常勤講師



(写真2) 「透かし」用の石製ピーターをもつスラウエシの老婆



(写真3) 100年前に報告されたスラウエシの石製ピーター模様

文書修復家は、素材の特徴や歴史を五感を使って探求し、修復作業に活用していく習性がある。「透かし模様」(watermark)の入った紙」という観点から樹皮紙を追ってきたわたしであるが、民博所蔵の標本資料のなかでも面白い発見をした。それはハワイの樹皮布タパ (tapa) である(写真1 A)。これは、無地の地味な作品と見られてきたものだが、修復家が日常的に使う透過光で「透かして見る」と、何と樹皮布に美しい「透かし模様」

が加工されていたのである(写真1 B)。よく調べて見ると、この一括コレクシヨン二五点のすべてに繊細な透かし模様が見つかった。この樹皮布の標本資料データには「ハワイのMauna Kea又はMauna Loaの海拔九〇〇〇フィートの埋葬洞窟で発見」という記載があり、更なる探究心を掻き立てる。お宝の再発見だ。

紙幣に見られるような「透かし模様」は、普段は気づかないが、光にかざしてみれば初めて見える特質がある。古代から、人びとはなぜ普段は見えない「透かし模様」という高度な技術と道具を生み出し、使い続けてきたのだろうか？ 樹皮布や樹皮紙に「透かし模様」を加工する道具が発見されているのは、今のところ世界でインドネシア・スラウエシ、メソ・アメリカ、そしてハワイの三つの地域だけである。スラウエシでは「透かし模様」のある樹皮布がシャーマン用の帽子などに使われた記録があるから、特別の階級の人びとや儀式用に生み出されたものかもしれないが、詳細は不明である。三つの地域それぞれに、ナゾの歴史を秘めているのだ。

世界的に見て、樹皮布文化が新石器時代からの姿でもっともよく残っているのが、インドネシア・スラウエシ島。その地で二〇〇八年八月、筆者がプロジェクト責任者となり実施した日本・

上がったのである(写真6)。

マヤ、アステカを含むメソ・アメリカにおける樹皮紙についても、高度な「透かし」技術使用の可能性やスペイン征服直後のアマテ文書を見ると、これらが「原始的な紙」であるという先入観の再考を促す。彼の地でのピーターは紀元前四〇〇〜三〇〇年ごろかそれ以前の地層から発見されているようなので、ピーターの発展経緯から考え、中国などでの「樹皮紙使用痕跡」の探索が必要であり、それ次第では「紙の発明」場所と時期に関する現在の定説を覆す可能性もある。

すでに、素材植物カジノキのDNA分析、石器ピーターの比較検証など、あらたな科学的調査・分析技術を駆使して物質を研究することが必要となってきた。この必要ではなかるうか？

二〇〇九年は、そのような新しいチャレンジの年になることを期待している。「樹皮紙(Beaten Bark Paper)の埋もれた歴史」という一文を『百万塔』(東京、紙の博物館発行)第一三〇号に掲載している。知られざる世界を学ぶために一読いただければ幸いである。

インドネシア合同のフィールド調査では、画期的な発見があった。現在も樹皮布に「透かし模様」を加工する石製ピーター(Ke Toah)を使っている老婆を見つけたのである(写真2)。一〇〇年前にオランダ民族学者により報告されたピーターにある模様とそっくりだ(写真3)。ピーターとは樹皮を叩いて薄くのはず道具である。この地域では同時に透かし模様を入れるにも使われている。

ワヤンベールに代表される美しい樹皮紙(Galuwang)文化へ転移したことが考えられる。

他方、メソ・アメリカ地域では、これまでの先人達の考古学、民族学調査研究でも、「透かし模様」加工用と思われる石製ピーターがたった一件報告されているのみだ(写真4)。しかし、これは研究者の「見落とし」かもしれない。というのは、先日アメリカの友人から紀元六〇〇〜一五〇〇年ごろのものと思われる石製ピーターを見せてもらったこと、これまでの専門家は表面のユニークな顔の彫物だけに注目していたのだが、「写真5」、修復家が、そのピーターの裏面に斜光線当てた途端、ハワイの樹皮布に伝統的に使われてきた「透かし模様」Upena Pupuに酷似した刻面が浮かび

(写真6) 写真5のピーター反対面の模様刻面



(写真4) 50年前に報告されたメソ・アメリカの石製ピーター模様



(写真5) メソ・アメリカ出土の石製ピーターのトップ面

曲面が描く、 居心地のよい博物館

小林 繁樹 (こばやし しげき)

本館文化資源研究センター



国立アメリカ・
インディアン博物館／アメリカ

ことができる。建物から壁、展示台と、ほぼすべてが曲面で構成されているのも大きな理由だろう。

このところ、博物館の直線や完全円などで構成された空間や展示台には、違和感を覚えていた。対峙する構えが求められているようで、堅苦しいのである。

ことに人文系の博物館では、四角いガラス製の展示台が直線的に配置されている場合が多いようだ。アメリカの主要な自然史博物館なども、展示品は箱型ショーケースに入れられて展示されている。

大英博物館の、例えばリニユールされたアフリカ

国立アメリカ・インディアン博物館は、一言でいえば、とても居心地のよい博物館である。文化・教育施設であり、すぐれて政治性を帯びる博物館をこつした情緒的表現でまとめていることが妥当かどうかはわからない。けれど、その内容といい施設といい、その居住まいが気に入っている。

博物館はワシントン特別区の中心部ナショナル・モールの端、世界人気一番の国立航空宇宙博物館の東隣にある。さらにいえば、国会議事堂のいわば真向かいに位置する。二〇〇四年に開館した、スミソニアン協会・博物館群の最新で一八番目となる博物館である。開館までに一五年の歳月を要した。アメリカ先住民の暮らしや言語、文学や歴史、芸術などに貢献する生きた文化施設として設立され、美術や工芸、生活文化資料を八〇万点ほど所蔵する、世界最大規模の博物館である。

この博物館は、まずその外観から印象的である。風や水によりかたち作られた自然の地層をイメージした建物は、全体が波状にうねりながら建つ。そして建物の周囲には森や湿地、畑や草地といった先住民の元からの生活の場、いわば原風景が再現されている。西欧的に都市計画されたモールの真ん中にながら、ここだけはまるで大自然のなかにいるようだ。

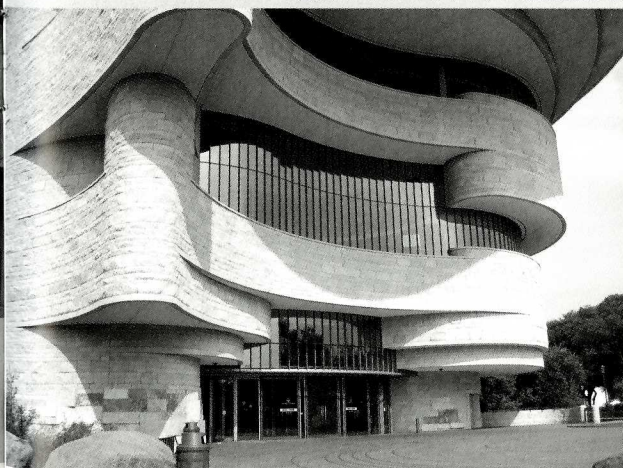
一階からなかに入ると、四階まで吹き抜けの円形スペースが広がる。ここでは歌や舞踏といった催しが日々、開催される。展示は四階の映像シアターから始めるとよい。そして世界観や哲学、伝統的な知識を説明する「宇宙」、一四九二年のコロンブスによるアメリカ大陸発見以降の歴史を展示する「人びと」、三階の現在の生活を表現する「暮らし」とまわれば、ほぼ全体が見渡せる。リソース・センターも充実している。

展示の表現方法を見ても、ゆつたりとして落ち着く

やアメリカ、日本ギャラリーもそつである。規則正しい展示台の配列などは、精密機械工場のようにもある。フランスのケ・ブランリー美術館も、カーブを描くアプローチや革張りの仕切り壁などはあつても、展示場はガラス張りの方形の展示台がところ狭しと並んでいる。

西欧文化は、直線やら完全円といったきちんとした線を大切にしているのかも知れない。安上がりりとなる四角形の展示台が選ばれやすいこともわかる。けれど、やはりわたしは不規則な曲線や曲面によさを感じる。これは、いわばデザイナーの世界観の違いなのだろうか？

国立アメリカ・インディアン博物館の外観



国立アメリカ・インディアン博物館の展示場



大英博物館の日本展示場

牛 鬼

祭礼用練り物(牛鬼)(標本番号H37058、高さ/430cm 幅/240cm 奥行/440cm)

笹原 亮二 (ささはら りょうじ)

本館民族文化研究部

牛鬼は、愛媛県の南部、宇和島や大洲などの南予地方の祭りではおなじみの存在で、牛鬼が出る祭りは一五〇カ所にもほる。宇和島の宇和津彦神社のように、一カ所でたくさん牛鬼が出る祭りもあるので、南予全体でどれくらい数の牛鬼がいるのか見当もつかない。竹の骨組みを赤い布やシユ口で覆ったドンガラとよばれる胴体、長い首の先には鬼ともウシともつかない恐ろしいな形相の頭、剣型の尻尾をもった牛鬼は、一〇〜三〇人ほどの子どもたちや若者たちによって祭りの際に担ぎまわされる。いつからこの地方の祭りに登場するようになったかは不明であるが、一八世紀の記録には既にその姿を確認できる。

牛鬼は、加藤清正が朝鮮出兵で敵を脅した、地元の領主が敵の退治に用いた、人びとが獣狩りに用いたのに始まるといった

さまざまな起源が伝わっているが、正体は今ひとつはつきりしない。人に悪さをする妖怪としての牛鬼ならば、『枕草子』や『太平記』を初め、西日本各地にも話が伝わっているが、南予の祭りの牛鬼とは大分勝手

が違ふ。祭りでは、牛鬼は御輿みこしの先導や露祓いのほか、大きな首を家々に突っ込んで悪魔祓いをおこない、徹頭徹尾、善い奴なのである。もつとも、かつてはつきあいの悪い家や祝儀をけちる家には尻尾を突っ

込んでガラスを割ったりしたというから、「徹尾」とはいえないかも知れないが。

とはいえ、この顔は恐い。じつはこの顔は、戦後宇和島の張り子職人が考案し、瞬く間に広まったものという。それ以前はもつと牛っぽい穏和な表情であったらしい。まあ、このくらいのはうが、露祓いや悪魔祓いの威力がありそうので、頼もしい気がしないでもない。



牛鬼・蛇形・絵馬



子連れフィールド・ワーカー奮闘記 アメリカ篇 すべての子どもたちの健康を祈って

玉山 ともよ (たまやま ともよ)

総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程

先住民社会の変化を調査

アメリカ合衆国ニューメキシコ州、ここには広島・長崎へ落とされた原爆の原料となったウランという天然資源が豊富で、とりわけアメリカ先住民の居住している地域で採掘が、一九四〇年代後半から一九八〇年代初頭にかけておこなわれてきた。わたしのフィールドワーク地は、ウラン鉱山によって大きく社会が変化してきたラグナ、アコマ、ナヴァホの三先住民保留地。癌などのウランによる被曝ではないかと疑われる病気が多い。しかし現在に至るまで健康調査はおこなわれておらず、掘り返された場所もすべて修復されてはいない。

そして今再び、「地球温暖化に抗するのは原子力発電しかない」と、ウラン価格が高騰したために、再開発がブームとなるうとしている。わたしはウラン鉱山開発による先住民社会の変化状況を把握すべく、そこから車で一時間半ほど離れたアルバカーキの街に住みながら調査をしている、しかも子ども三人と「娘」風葉七才、息子「野原」三才、そして五月に生まれたばかりの娘「椿」。全員を引き連れてやって来た。

現在は日米教育委員会のフルブライト奨学金を得て一年間の予定で滞在している。学生向けの助成金等には、ほとんどと言っていないほど子どもがいる(家族を伴

う)という状況が想定されていない。今回は唯一家族手当があり、応募した時点で既に子どもが二人いたので、受かったときにはとても有難かった。だがしかし、もう一人できてしまった！無事自宅出産した後、八月の渡米までわずか三カ月しかなかった。

たくましい子どもたち

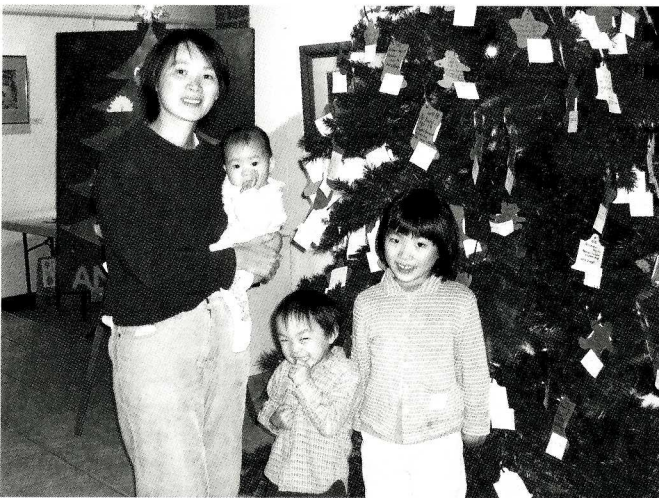
幸いこちらに着いてすぐ家は見つかり、小学校と保育園もすぐ見つかった。子どもたちは英語がまったく話せないの

トイレの場所だけ教えて放り込んだ。平日は学校と園でいきなり一日の大半を過ごすことになった。日本人は周りに誰もいない。メキシコ系が多く、スペイン語は飛び交っているが、日本語は家でだけ。それでも子どもたちはたくましい。元気でいてくれるからこそ、昼間の赤ん坊しかいないときにわたしはやっと勉強する。

保留地を訪れるときは、子ども連れでなるべく行かないようにしている。保留地内はウラン鉱山とウラン精錬施設によって低レベル被曝地帯と考えられる場所が多いが、広大な面積のすべてがそうであるわけではない。鉱山跡から2キロも離れていないラグナ・ブレロのある村でも、人びとはまったく普通に生活しており、危険であると考えられる場所はフェンスで囲まれ侵入禁止になっている。

わたし自身は特別な防衛は何もしないし、そもそもすることもできないが、やはり自分の子どもたちを彼らが知らないうちに被曝の危険に晒すことには抵抗がある。

ネイティブ流に言えば、子どもは母なる大地からの贈りもの。三児の母として、すべての子どもたちが放射能汚染にさらされないよう、その原料たるウラン開発の行方を見守りながらフィールドワーカーしている。まさに子どもと一緒に！



クリスマスツリーの前で子どもたちと

的に命中！ポーク！

小野田 俊蔵

(おのだ しゅんぞう)

佛敎大学教授

人生は
りて
決ま
りて
文句

弓矢にまつわる諺

「苦しまぎれの言い訳」を笑う、こんなチベット語の諺があります。

nda'la rgyag shed yod kyang/ gzhul la
dkar shed mi 'dug/「矢を射る力はあるんだけど、弓を引く力がないんだ」。

「射る」という行為は、弓の弦を引つ張つて離す(放つ)一連の行為ですから、これは明らかに矛盾です。けれど、こんな風に言われると、正しい理屈であるかのように

絵：小野田 俊蔵



力を射る力はあるんだけど、弓を引く力がないんだ

思えるところが不思議です。おもちゃの鉄砲を使った夜の射的場で、お父さんにコルクのタマを詰めてもらい、装填してもらって撃っている幸せそうな親子の姿をわたしは想像しました。けれど、弓の場合は無理ですよ。洋式のアーチェリーならできると普通の弓では「さあ、射るだけで良いようにしたから射ってみなさい」と子どもに手渡す訳にはいきません。

必要以上に気張らないチベット人の気

質が読み取れるこんな諺もあります。

nda' za phang par bkang yang/ g'at
sa mde'vi nya rse gang/「弓を力一杯強く引つ張るのはいいけど、せいせい矢の長さまでしか引けない」。

やり過ぎると元の木阿弥になる、という意味でしょう。モンゴルには「自分の布団の丈に合わせて足を伸ばせ (KOnjle-yin-yen ki-ber kOl-yen jig)」という諺も

あります。自分に見合った規模で活動をするべきだ、という意味です。着実に目が行き届く範囲で問題を処理しているのだと自分では思っている、実際に思っているのを越えていて、気が付くと大失敗ということがあります。引つ張り過ぎてつがえた矢が弓からはずれたら、もう一度最初から矢をつがえなければ致し方ありません。チェーン店を拡げ過ぎて倒産した会社を思わず連想してしまいます。身体感覚として掴める範囲、というのが本

弓を力一杯強く引つ張るのはいいけど、せいせい矢の長さまでしか引けない



来は我々人類にもっとも合った生き方なのでしよう。バーチャルな世界だけが広がっていつて、身体感覚では全く掴めていない仮想の世界に操られる、などという事のないようにしたいものです。

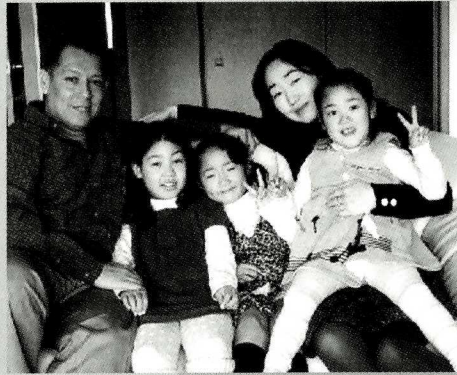
美しい放物線のその先

ところで、チベットやモンゴルの弓は左のほうから矢をつがえて引つ張り、発射する瞬間に弓全体を時計回りに右に少し倒しながら矢を射ます。矢を弓の上に載せるようにして発射するのです。所謂アーチェリー型です。右のほうから矢をつがえる日本の長弓の射方とは全く違うのです。矢は少し上空に向けて発射され、標的までゆるやかな放物線を描いて飛んで行きますが、これが不思議に見事に的に命中するのです。

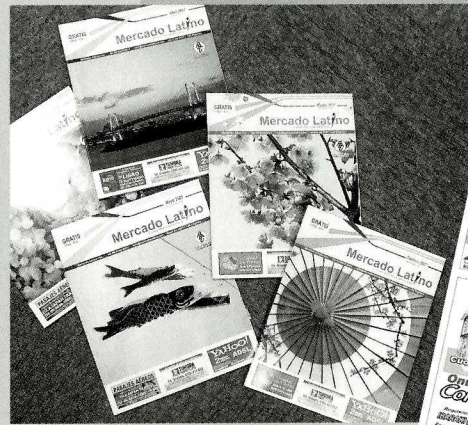
ブータンなどでは標的の近くに見物人がいて、的にあたると皆んなが大声で「hog (ポーク)！」と叫んで踊り始めます。そう言えば、那須の与一が扇を射止めたときに敵味方なくほめ讃えた、そんな風景を彷彿とさせます。但し、日本の通し矢のように矢を力任せに勢い良くまっすぐ飛ばしてそれが的にあたって、それは当たり前過ぎて、彼らには美しくとも何とも見えないのかも知れません。美しい放物線のその先の予想も付かない中がまさしく命中なのでしよう、わかります。

編集長・社長のロベルト・アルバさん。
来日して18年になる

アルバさん一家。
休日は、できるだけ家族と一緒に過ごす



社員の山田めぐみさん。
修士論文で『メルカード・ラティノ』を
取り上げたのが縁



毎月の表紙を、季節を感じさせる
日本の自然や行事の写真が飾る



掲載された広告。「持ち家の夢」を
日本でかなえるようになった

外国人 として 生きる

在日南米人のドラマを載せて

古屋 哲 (ふるや さとる)
大谷大学講師

「工場」の夢をかなえる

「日本に来たばかりのころ、自動車部品工場で働いていた。ラインに向かつて同じ作業を繰り返していると、いろんなことを考えてしまう。誰もが夢を見る。ほくには何ができるだろう。この国で何かするのは、難しい。でも、本気でやればできるはずだ」。

一九九四年にロベルト・アルバさんがはじめたのは、無料配布の広告掲載誌『メルカード・ラティノ』。そのころ目にした英語誌が、ヒントになった。日本語を知らず、情報がない在日南米人たちには、そうしたメディアが必要だ。

はじめは街のコピー機や市民団体の簡易印刷機を使い、紙を折ってホットキスで留めた。今では、A四版変形、一六四ページ上質紙フルカラー印刷、部数二万、毎月第一土曜日発行の堂々たる雑誌。発行主体は、「有限会社メルカードラティノ」、社長のロベルトさんほか、ペルー二人と日本人一人の社員をかかえる。フリーランサーの記者やデザイナーは一人。

表紙を開けると、全面から八分のページまで、大小の広告が並ぶ。が、意外と読み物の記事が多い。英BBCやEFE通信社の記事や、在日南米人、老若男女の人物紹介だ。

在日南米人の世界、 日本語の社会

大阪市北区に事務所があるが、配布先は在日南米人が多い東海地方から北関東にまで広がっている。はじめは、南米食材店やレストランを一軒ずつ訪ねて、雑誌を置いてもらった。「空いた貸店舗や自宅を店にするから、見つけにくいところにある。店構えは小綺麗でもおしゃれでもない。看板が無造作に出ていて、扉を開けるとラテン音楽が大きな音で鳴っている。店員はメニューをもってくるのが遅く、注文すると食べきれないほどの量が出てくる」ような店がねらいどころ。まちがいにく経営者もお客も南米人だ。

掲載される広告にも、そうしたレストランやディスコ、食材通信販売がある。航空券と本国への宅配便、求人広告や入管手続代行は、いかにも移民らしい。化粧品、服飾、美容室は女性が対象。広告の新しい傾向は、建て売り住宅と、インターネットテレビだという。住宅販売が目立つのは日本の金融会社が外国人にもローンを組むようになったからだ。不安定な彼らの雇用を考えるとすこし心配。

読み物もだいたい、南米人たちは「どれほど日本的になっても、いつでも自分たちのことばで読みたいんだ」。通信社の記事は、ロベルトさんが選ぶ。文化記事

が好みだけど、あきないいろいろな混せる。人物紹介は、協力記者のアントニオ・カルテナスさんが取材して書く。日本の弱小児童サッカークラブを「優勝ラッシュ」に導いたトレーナー。工場で南米人労働者を人間あつかいしない課長の通訳をした音楽家の体験談。幼くして両親を亡くして畑仕事に明け暮れ、今は毎年いくつものマラソン大会を完走し「運動靴を脱ぐ日はこない。死ぬときは走りながらだ」とうそぶく六四歳。大阪の工場で突然、人には見えないものが見えることに気がついて、幻想画の画家になった男性。

読者からの便りに、くこの母親に送った、という人もいた。きつと雑誌をめくりながら「息子はこんな顔を見てのねえ」とつぶやくのだろうな、とロベルトさんを喜ばせる。

こうした在日南米人の世界を支えるためにも、日本社会との折衝が必要になる。ロベルトさんは、工場で労災に遭って一カ月休み、そのときから日本語の勉強をはじめた。それでできることがぐっと広がった。そのころ住んでいた大阪市東成区には、小さな印刷所がたくさんある。そこで仕事を受けてもらえるか尋ねてまわった。どこでもよい返事をもらったが、結局きめたのは、中堅企業である大阪書籍の印刷部だった。

娘たちに贈りたいもの

「ペルーのような低開発国にはチャンスがないが、ここにはある。広告を載せる人たちはみんな、何か違うこと」をした。工場労働という運命づけられた境遇から、抜け出したいんだ。美容の宣伝をしている人は、弁当製造工場で働いていたかもしれない。でも本国では美容を勉強して、あるときわたしも何かやってみよう、と決心したんだ。そういう瞬間が、好きなんだ。小さな広告にも、ひとつひとつにドラマがある。前向きに生きていくという物語がね」。

ロベルトさんには、日本人の奥さんとのあいだに一〇歳、七歳、五歳の三人の娘がいる。父親として娘たちに贈りたいのは教育だ。でも、とくにペルーについて学んでほしいとは、考えないという。

その代わりに、ロベルトさんは、自分の子どもたちのことを話して聞かせることがある。「街のパン屋さんにその日のパンを買いに行くのは子どもの役目だった。で、起きたらすぐに行く。学校の友だち、おばさんたち、ちょっと気になるあの子。みんなが店を列を作っている。毎朝の小さな冒険。そんな話をしてやると、娘たちも喜んで、ペルーに行きたいって言うんだよ」。

歳時 世相篇

⑩ 【阪神淡路大震災】

冬の灯り、震災の記憶

林 勲男（はやしいさお）

本館民族社会研究部

くの人びとがその時を待ちかまえてい
る。そして、点灯とともに大きな歓声が
あがる。

イタリア出身のヴァレリオ・フエステ
イ氏をアートディレクター、今岡寛和氏
をプロデューサーとしたこのイベント
は、当初は東京を開催地として企画され
たものであった。しかし阪神淡路大震災
が発生したため、今岡氏の故郷である神
戸に変更し、鎮魂と追悼、街の復興を祈
念し、一九九五年一月二日に神戸ルミナリ
エとしておこなわれるようになった。

第一回の来場者数こそ二五〇万人ほ
どであったが、第三回以降は四〇〇万
人から五〇〇万人を記録している。神

戸市や兵庫県以外からも多くの来場者
を集めるようになった一方、回を重ねる
にしたがって、震災の犠牲者の鎮魂と追
悼、街の復興祈念という目的は、来場者
の意識からは薄らいできていることは
確かである。

震災体験者の中には、無残な傷跡がま
だ多く残る街で開催された、第一回ルミ
ナリエの整然とした灯りの造形に、生活
再建への希望の光を見ようとした思い
を、会場に足を運ぶことで新たにしよう
とする人びともいる。他方、眩いばかり
のイルミネーションの光は、未明の暗闇
や倒壊した建物に閉じ込められた時の閉
塞した闇の記憶と、あまりの対照をなす

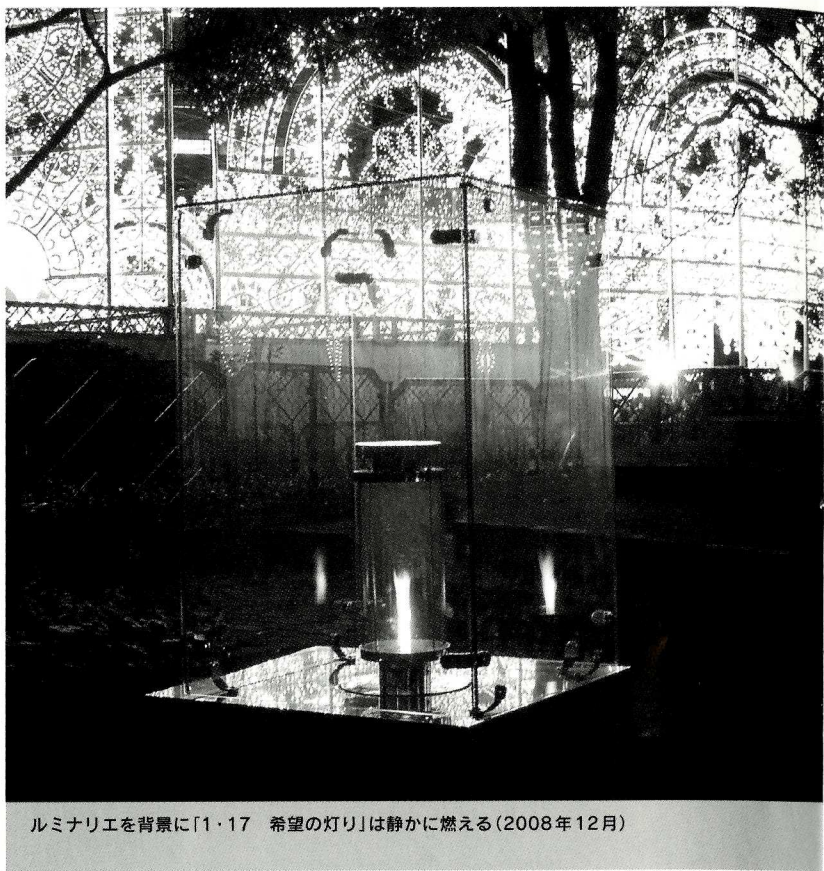
がゆえ、かえってあの朝の体験を呼び起
こされてしまうと、敬遠する人もいる。
来場者のなかには、ルミナリエをクリ
スマス・イベントととらえている人もい
るかも知れないが、震災体験者にとって、
それが意味するところは人それぞれに大
きい。

歴史のモニュメント

光のアーケードを通り抜けると、メイ
ン会場である東遊園地に到着する。そこ
には、ヨーロッパの古い広場を思わせる
ように、建物のファサードのようにイル
ミネーションが並ぶ。

光の回廊

一月二日、旧居留地内の仲町通り沿いか
ら神戸市役所の南にある東遊園地まで、
幾何学模様で構成された光のアーケー
ドが登場する。期間中の夕方には、イル
ミネーション点灯の瞬間を見ようと、多



ルミナリエを背景に「1・17 希望の灯り」は静かに燃える(2008年12月)

その御影石の台座には、次の碑文が記
されている。

一・一七 希望の灯り

一九九五年一月一七日午前五時四六分
阪神淡路大震災

震災が奪ったもの

命 仕事 団欒 街並み 思い出

：たった一秒先が予知できない

人間の限界……

震災が残してくれたもの

やさしさ 思いやり 絆 仲間

この灯りは

奪われた

すべてのいのちと

生き残った

わたしたちの思いを

むすびつなぐ

同じ公園の敷地内、一・一七 希望の
灯りのすぐ近くにある噴水は、地下に
降りてみると、それが「慰霊と復興のモ
ニュメント」であることがわかる。震災
で亡くなった人びとの名前を刻んだプレ
ートが内部の壁面に並んでいる。おそら
く、身内を亡くした方であろう、プレ
ートの名前をゆつくりと指でなぞっている
姿を見かけたことが何度かある。

追悼の時、広がる絆

毎年一月一七日の早朝、一・一七 希

この東遊園地は、一八六八年に日本で
最初の西洋式公園として開園した。当初
は旧生田川の堤防敷に、神戸居留地開設
後まもなく造られた外国人専用の運動公
園であり、「外国人居留遊園」とか「内外
人遊園地」とよばれていた。一八九九年、
不平等条約の改正により外国人居留地は
廃止されたが、この公園は旧居留地の東
にあったことから、後に「東遊園地」とよ
ばれるようになった。

本についての著作も多いウエンセスラウ・
デ・モラエスの胸像や「ポウリング発祥
の地の碑」、「近代洋服発祥地の碑」など、
明治以来の国際都市・神戸の歴史を垣間
見せている。

阪神淡路大震災の発生により、東遊
園地には新たな記念碑が加わることに
なった。一つは「一・一七 希望の灯り」
という、ガラスケースにおおわれたガ
ス灯である。震災五周年にあたる二〇
〇〇年一月一七日に灯りがともされた。

望の灯り」からロウソクに移された火は、
東遊園地内西側の広場に運ばれ、各地か
ら届けられた竹製の灯籠にともされる。
真冬の早朝、張りつめた冷気の中、約一
万本の柔らかな温かみのある灯りが、「一
七」の日付を浮かび上がらせていく。こ
の日、この時間、阪神淡路大震災の被災
地となった多くの場所で、同様の行事が
静かに執りおこなわれる。

二〇〇七年一月一七日、黄色いウイン
ドブレーカーを着た約二〇名の団が、
東遊園地の灯籠の点灯に参加していた。
二〇〇四年一〇月に起きた新潟県中越
地震の被災地のひとつ、川口町木沢集落
からの一行である。ボランティアとして
木沢で活動していた大阪大学の学生た
ちや、西宮市の復興住宅に暮らす被災者
との交流のため、前日に雪の中越を立ち、
神戸入りしていた。

同じ年の一〇月二三日、今度は西宮
市の復興住宅に暮らす一七名が、震災
四周年を迎えた木沢を訪れた。一行は
片道八時間の長旅の疲れも見せず、米
の収穫を終え、冬仕度に入った山間の
集落での再会を、木沢の人びとと共に
喜び合った。

一九九五年一月一七日午前五時四六
分。その時からまもなく一四年が経とう
としている。今年は何のようない
出会いがあるのだろうか。

かつての清平市場のにぎわい
(1998年9月)



レストランの水槽で
売られるゲンゴロウ



調理されて出てきたゲンゴロウ



村の人びとの食事風景

ゲンゴロウ (学名: *Cybister japonicus*)

甲虫目に属する昆虫で、中国・日本・韓国など東アジアに広く生息している。亜科であるゲンゴロウ科に属するものを含めると、世界中で3,000から4,000種が知られている。日本でもかつては池や沼などで数多く見られたが、水質汚染や農薬などの影響で激減し、現在では10種あまりが絶滅危惧種あるいは準絶滅危惧種に指定されている。



(提供: 陳冠成)

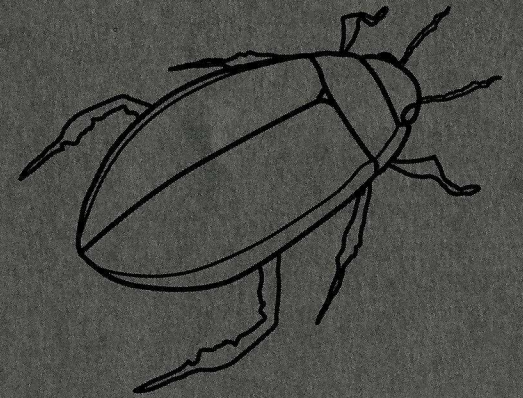
生きものと食べもの

「中国では、四つ足のものはテーブル以外、空を飛ぶものは飛行機以外、何でも食べる」という俗諺を聞いたことのある方は多いだろう。さすがにこれは大げさだが、中国で暮らしていると、日本では普通あまり口にしないうる食材が市場で売られていたり、食卓にあがってくることはたしかに多い。

特に東南部の広東では、「野味」つまり野生動物の肉に代表されるように、多種多様なものを食するというイメージが中国国内でも定着している。広州市内の清平市場では、家禽類や魚介類はもちろん、かつてはイヌやネコからサンリヤやヘビやハクビシンにいたるまで、

ところで、「水甲虫」というのは広東での通称で、標準中国語でのゲンゴロウの名称は「龍虱」という。龍

生きもの 博物誌 【ゲンゴロウ】 東アジア



「水ゴキブリ」を 食べてみるかい？

川口 幸大
(かわぐち ゆきひろ)

本館機関研究員

驚くほどたくさん生きものが生きたまま売られている。しかし、SARSが猛威をふるって以来、こうした野生動物の多くは食材として取引することが禁じられ、さらに市街地が整備されたこともあいまって、清平市場の規模はだいぶ縮小してしまった。現在では漢方薬の材料をあつかう店舗が集積しているくらいで、当時の面影はすっかりなくなっている。

水ゴキブリ？

このように市場で目にするのでできる食材の数は減りつつある広東ではあるが、それでもときとして未知の食べものに出くわすことがある。あるとき村の知

のシラミとはこれまた風流な呼び方だが、知らない者にとっては、「龍のシラミ」を食べてみるかい？」とた

人宅に招かれたさい、主人の妻からこんなふうになすねられた。「水甲虫を食べてみるかい？」「ええっ！」とわたしは正直驚いた。「甲虫」とは広東の方言でゴキブリのことである。ということは、「水甲虫」は「水ゴキブリ」……。ゴキブリか……。でも水ゴキブリって何のことだろう？と内心ははらしなげに考えていると、わたしのそのようすを見て主人の妻は笑って言った。「いやあ、水ゴキブリって言っても、家のなかにいるゴキブリじゃないよ。あのゴキブリはさすがに食べないけど、これは食べていいんだ。身体にいいんだよ」。皿に盛られて出てきたものは、全身が茶黒く、足にはヒゲのようなものがついていて、一見したところたしかにゴキブリに見えなくもない。しかし、よくよく目をこらすと、胴体には甲羅があつてゴキブリより固そうだし、全体的に丸みを帯びたかたちをしている。そっか、これはゲンゴロウだ！そう。「水甲虫」とはゲンゴロウのことだったのである。

食材としてのゲンゴロウ

教えられるままに、まず羽の部分を取りはずしてから、その下の白っぽい身を食べる。少し苦みがある程度で、それほどくせのない味である。

家庭での一般的な調理方法は、生きたものを買ってきて、まず下ゆでしたあと、塩、山椒、八角、桂皮などとともに三分間ほど煮るのだという。腎臓によいとされていて、夜尿症の改善に効果があるということだ。

市場では、今オスが五〇〇グラム三〇〇円、メスが二〇〇円ほどで売られている。そのほとんどは食用に養殖されたものである。メスがオスより高いのは、メスの方が栄養価が高いとされているからだという。

すねられても、やはりとまどってしまつにちがいない。



3つの時代の 学校経験

金子 正徳 (かねこ まさのり)

本館機関研究員

調査の恩人、アリさんについて

ある男性の経験から、学校について考えてみよう。

彼は、熱帯に位置するスマトラ島の南端にあるランブロン州(インドネシア共和国)に住んでいるランブロン人である。ランブロン人は、いくつかの民族集団を総称する名称なので、もうすこし正確にいうと、プビアン人である。ランブロン人の村落における既婚者は、結婚時につける慣習称号を用いて互いをよび合う。彼の慣習称号は、スタン・プニン・バン・プミ。最初の「スタン」の部分は、プビアン人

一八歳になったことでそれ以上の就学をあきらめたのだった。彼の学校経験はここで終わる。

学校経験と人びとのかたち

アリさんの学校経験は、学校というものが国家という制度と強く結びついていること、それゆえ、特定の社会的・政治的状況によって、教育の内容や意図、そして組織を大きく変えるものであることを改めて認識させてくれる。しかし、学校は単にそれぞれの国家における政治社会体制を推し進めるために個人を規範化する装置ではない。

前述の学校経験は、彼をはじめとする子どもたちが、慣習に基づく暮らしを送っている自分たちの村の外に広がる世界を、学校教育がもつ限界のなかで学び、それぞれの未来を思い計ったことを、改めて認識させてくれる。

フィールドで考えることは、アリさんをはじめとする多様な人びとの人生に絡み合う出来事と、強いつながりをもつ。彼の学校経験が秘めていたこんな想定外の事実や、個人的な経験を、統計的な数値や公的な記録から推し量ることはできない。こうして学校や国家などについて思考を巡らしたあとに、フィールドという場が縁があったそれぞれの方の人生へ関心はふたたび戻っていく。

日本へ行くのかと喜んでくれる人である。アリさんにはじめて出会ったのは二〇〇〇年二月だったから、すでに知り合ってから一〇年目に入ろうとしている。二〇〇〇年当時、彼は慣習に関する聞き取りのときにはよく同行してくれたものである。好奇心が強く、わたしをそっこのけで相手にさまざまな質問をしていたことを思い出す。予期しない話題の展開になったことで、調査を始めたばかりでよくわかっていなかったわたしが質問するよりもかえってさまざまな背景や事情がわかり、感謝することが多かった。また、そのような意味では調査の恩人である。

アリさんの学校経験

アリさんはオランダ植民地時代、日本による占領統治時代、そしてインドネシア共和国時代という三つの時代に少年期をすごした。このため、小学校進学に關してだけでも興味深いエピソードがある。

まず、一九三七年に三年制の小学校へ入学した。オランダ植民地時代の小学校は義務ではないし、むしろ限られた人しか行けなかった。アリさんが幼児期に病気をし、右目の視力を失っていたことから、将来のために教育を受けさせたのだ。当時は全額個人負担だった教育にかかる費用を両親が捻出可能だったことも背景としてある。

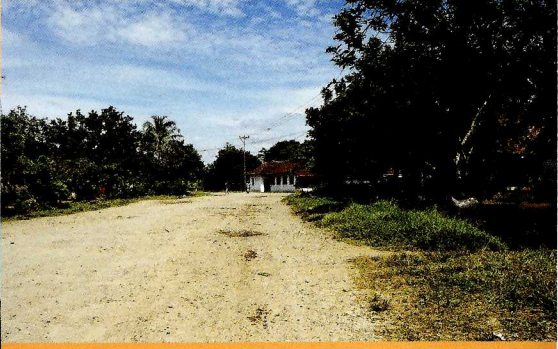
当時は就学年齢が決まっておらず、腕を頭の上に回して、反対側の耳がつかめるかどうかで判断したという。このような体格を基準とするやり方だったことで、病気がちで小柄な子どもだったアリさんは、一〇歳になってから入学したのだ。そして一九三九年に、小学校を卒業した。進学しなかったのは、もう勉強したくなかったからではなく、当時のオランダ政府が、民族や人種を基準として進学を制限していたからであるという。音楽が好きだった彼は、オランダの王子誕生に際して小学校で教えられたという慶祝歌を今も覚えている。

ところが、一九四二年に、彼は再び小学校へと入学した。日本が第二次世界大戦において一九四二年から一九四五年にかけてインドネシアへ侵攻し、占領統治をおこなったことがきっかけである。日本はオランダとちがって民族や人種を基準として制限しなかったから勉強する可能性を感じたと、アリさんはいう。彼は今も、そのとき教えられた「君が代」を覚えていて、突然歌ってくれることがある。そして、時代を反映し、兵士に教わったという軍歌も。

一九四五年に日本は敗戦し、インドネシアから撤退する。一九四五年八月十七日に独立を宣言したインドネシア共和国のもとで、新しい小学校がひらかれた。アリさんは一年間通ったものの、すでに



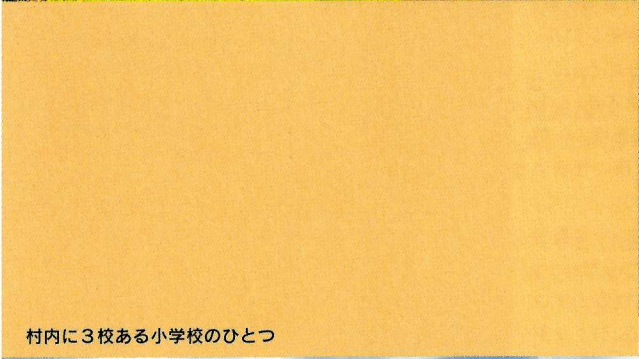
プビアン人の伝統家屋の一例(現在は激減)



村内の一風景



アリさんと筆者 (Vivit Bartoven撮影)



村内に3校ある小学校のひとつ



研究者と話そう



■時間：14:30～15:30(予定)

■常設展示場観覧料が必要です。

国立民族学博物館(みんなく)の研究者が来館された皆様の前に登場します!

「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別!

どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

葉草のジュースを作っているヴァヌアツの伝統医療の治療者

実施日・話者・話題・場所

※都合により、予定を変更することがあります。

1月18日(日)

白川 千尋 (先端人類科学研究部准教授)

オセアニアの医療

於:オセアニア展示

1月25日(日)

田村 克己 (副館長・民族社会研究部)

話題:女性の話を聞くーフィールドワーク入門

於:東南アジア展示

編集後記

本号は今年の干支にちなんで「ウシ」がテーマである。民博では今年も年末年始行事としてウシにちなんだ企画をするとかで、民博職員の個人情報防備体制?をくぐって丑年生まれが探索され、わたしも見つかってしまった。ところで、十二支にはウシをはじめ、ウマやヒツジなど家畜が多く登場する。中国に起源があり、若干の動物の交替があるが、隣接する朝鮮やモンゴル、ベトナムなどにも存在する。いっぽう、西洋では十二支に似たものとして、占星術のホロスコープに十二宮があり、家畜の牡羊、牡牛が登場する。ともに性別が限定され、東アジアの十二支のヒツジ、ウシのように家畜種の一般名称ではない。そういえば、欧米や中近東では、日常生活でも家畜の性別や年齢を限定した一次語名称が多く使われ、一般名称に慣れたものにとって、オス～、メス～、仔～などと頭のなかで訳しわけるのが面倒くさい。家畜の繁殖と頭数にこのほか気を配ってきた牧畜文化に起源があるからだろう。ちなみに、遊牧社会として名高いモンゴルでは十二支はおろか、西洋のホロスコープにある牡羊、牡牛までヒツジ、ウシと一般名称を用いる。ジェンダーレスでは一歩進んでいるようだ。(庄司博史)



次号予告/2月号特集
刺繍がつなく世界

2009年1月号

第33巻第1号通巻第376号
2009年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎
庄司博史 中牧弘允 三尾 稔
山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 株式会社博報堂

製版・印刷 アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます

交通案内

■大阪・千里万博記念公園内

●大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分(茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。

●自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

